

アイコイ!

お見合い相手は非^{アイドル}日常!?

第一話

考えるよりも早く、身体が動いていた。

「きゃっ」

小さな叫び声を耳にして見上げる。

見れば茶髪の女子高生が階段を踏み外したのか、身体のバランスを崩し、こちらに落ちてくるところだった。彼女は先ほど購入したらしいグッズの袋を大事そうに抱え、まるで自分の身体よりグッズを守ろうとしているかのようだ。

咄嗟とつさに階段を駆け上がって手すりを掴み、片腕で彼女を受け止めた。その衝撃で、自分のキャスケットが階段下に落ちていく。だが大事なのは腕の中の彼女のほうだ。

どっどっど、と触れてるところから伝わる心音に、つい心配になる。

「大丈夫？」

そう言っつて女子高生を見下ろせば、青ざめた彼女がこくりと頷く。ほっとして、今度は彼女の抱える袋に目をやった。

「グッズ、つぶれてない？」

すると、女子高生は慌てて腕の中から抜け出し、グッズの入った袋の中を確認した。ペンライトにハンドミラー。丸めてあったポスターは少しばかりつぶれてしまったけれど、彼女はほっとしているようだった。

「ポスター、つぶれちゃったね」

そう声をかけると彼女は笑って答える。

「これぐらい大丈夫です。友達に頼まれたものじゃなかったし」

「そっか。それならよかった」

一段上にいる女子高生にっこり微笑む。

ちょうどその時、彼女の背後から同じ制服に身を包んだ少女たちが「えみ、大丈夫!？」と声をかけてきた。

「それじゃ、私はこれで」

友達らしき少女たちが来る前に背中を向けて、歩を進める。

「あ、あの、ありがとうございます!」

「ん、足元、気をつけるんだよ」

後ろを振り向かずに応えると、軽い足取りで階段を下りる。その拍子に、セミロングのこげ茶色の髪がふわりと舞った。そして階段下に落ちていたキャスケットを拾い上げ、ぽんぽんと軽く叩くと、階段上から呆けた声が聞こえてきた。

「……かっこいい」

その言葉に思わず苦笑を浮かべ、キャスケットをかぶってその場を後にする。

——また、やってしまった。

中条白雪。二十一歳。

中学から大学までずっと女子校に通っていた彼女は、卒業するまで『白雪王子』と呼ばれていた。というのも、女の花園で生きる他の女生徒たちには、高身長で面倒見がよく、さらには剣道部で活躍している白雪は、強さと優しさを兼ね備えた理想の男性に見えたから、らしい。特に困っている時に颯爽と現れて助けてくれる姿が、王子さまみたいで「かっこいい」のだそうだ。結果、白雪は周囲から『王子さま』ポジションを常に求められるようになっていた。

白雪自身も、友達や後輩たちの期待を裏切りたくなくて、なんとなく女性らしい格好を避けるようになった。今日だってスキニージーンズ、黒白ボーダーのカットソーの上に少し大きめのパーカーといった、女性らしいとは言いがたい格好をしている。

けれど、白雪だって女性——それも、素敵な男性と恋をしたいと願う一人の女性だ。
(就職をきっかけに女の子らしくするって決めたばかりだったのに)

白雪は今春から働く職場には、男性もいる。そのため王子キャラからは卒業しようと思ったのだが、どうすればいいのかわからない。さし当たって女性らしさを勉強するべく、かわいらしい女の子の出でくる恋愛ドラマを観てみた——のだが、思いのほか、はまってしまった。在学中はさほど恋愛に興味がなかったのだが、ドラマの中で繰り広げられる恋愛模様や人間関係の面白さにどんどん

んのめりこみ、ついには自分自身も「素敵な恋がしたい」と思うようになっていた。

そのために、まず外見を変えよう！

そう一念発起して買い物へ行くのだが、つい男っぽい服にばかり手が伸びる。思いきってワンピースやスカートを試着しても、長年の『王子さま』キャラが染み付いているせいか、鏡の中の自分に違和感を覚えるのだ。友人の意見を参考に、幾分違和感の少ないスカートを一枚だけ買ったが、着る機会もなくタンスの肥やしになっている。

今日こそは、女性らしい服装の自分を受け入れようと、そのスカートを引っ張り出したのだが、結局クローゼットに戻してしまった。

今日は、祖父の家へ卒業と就職の報告をかねて挨拶に行くだけだから、このままでもいいだろう。そう思い、いつもの格好で家を出たのだが、それが思いもしない事態を引き起こした。

白雪は、——なぜか今、某巨大ドーム前に来ている。

開場二時間前にもかかわらず、その出入り口は人でごった返していた。ダフ屋や、待ち合わせをしている若い女性、中には学校帰りなのか制服姿の集団もいて、『玲一』『ピースして』と書いたうちわを持ち、嬉しそうに集合写真を撮っている。そんな彼女たちを視界の端に入れながら、白雪は先ほどから時間つぶしのできるカフェを探し歩いている。が、これが一向に見つからない。

その苛立ちと人の多さに、ふつふつと怒りが湧き上がる。

(それもこれも、全部おじいちゃんが悪い)

白雪は少しよれたライブチケットを見下ろし、つい数時間前の祖父とのやりとりを思い返した。

「さあ白雪、欲しいものはなんだ、言ってみろ！」

年齢の割には若々しい声が、明朗快活に言う。

目の前にいるのは自分の名付け親である、母方の祖父だ。その祖父が魔法使いのおばあさんよろしく白雪に欲しいものを訊いてきた。

だが、ここは童話の世界でもなければ夢でもない、現実。白雪は有無を言わさぬ笑顔で答えた。

「非日常」

驚いて表情を変えた祖父に対し、白雪はいつさい表情を変えなかった。

——だって、いらない。

就職が決まったのだから、欲しいものは自分の給料で買えばいい。二十二にもなつて祖父に何かをねだるほど、白雪は子供ではなかった。しかし、祖父の善意を無下にするのも申し訳ない気がして、白雪は遠まわしに「いらない」と伝えるべく、あえて「非日常」と答えた。こういった抽象的な答えなら、何を提案されても「それは違う」と断ることができるからだ。

白雪の実の祖父、上条青慈は、様々な事業を展開する上条グループの現会長だ。最近まで代表取締役として活躍していたのだが、寄る年波には勝てず、ついに世代交代を余儀なくされた。本人はまだまだいけると豪語していたが、役員たちがそれを押し切つて現在の体制になったのだ。

そんな祖父は、世間とは少しずれた感覚を持っている。例えば、自邸で働く年頃のメイドが、ある男性に密やかな恋心を抱いていることを見抜くと、すぐに相手との仲を取り持とうとしたり、知

人の会社に訪問する際は、従業員全員に行きわたるよう、数百個単位の土産を用意する。

周囲の人間にしてみれば「そこまでするか?」と言いたくなるくらい、祖父は人のために全力を尽くす人間だった。当然、身内に対してもそれは変わらない。

だが、白雪は一般家庭の人間だ。母は上条家の人間だが、父は上条系列の孫会社に勤めるサラリーマン。自宅もローンで購入し、家族三人つましくも明るい生活を送っている。祖父はそれこそ魔法使いのおばあさん並に望みを叶えられるだけの財力を持っているが、その財力と並々ならぬ温情は、それを本当に必要としている人に向けてほしいと思う。白雪は基本的に平穩を望んでいるのだ。——だけど。

それでも心のどこかに、自分を思い切り変えてみたいという変身願望がある。自分を変えて、日常を変えたい、と。そんな想いが白雪に「非日常が欲しい」と言わせたのかもしれない。

——けれど、それは自分ですることだ。

事実、白雪は今、女性らしくなるために試行錯誤の最中なのだ。

だから、「非日常」という答えが嘘をつかずに祖父に諦めてもらえる、最適な答えだと白雪は思っていた——のだが、目の前にいる祖父は、一転、それはそれは嬉しそうに口元を綻ばせた。

「気に入った!」

想定外の言葉に面食らう。何を提案されても「非日常じゃない」と反論する気でいた白雪は呆氣にとられた。

「そうかそうか。こんなに面白いものを要求されたのは初めてだ」

さすが人生経験を重ねているだけのことはあり、上条青慈という男は、孫の難解な要求でさえも自分が乗り越えるべき壁と考える、ポジティブな人間だった。

「今はちよつと思いつかないが、……そうだな」

白雪は絶句しつつも、引き出しから何かを取り出す祖父を目で追う。

「おまえにこれをやろう」

差し出された一枚のチケットを見て、白雪は目を丸くしながら顔を上げた。

「友人のために手配したものだ、先ほど必要なくなったと連絡があつてな。白雪がせっかく卒業と就職の報告に来てくれたんだ。手ぶらで帰すわけにもいかんだろ」

そう言いつつ、祖父はどうか受け取ってくれと懇願するような視線を送ってくる。それに負けて受け取った祖父の善意のチケットには、『「デビル ライブツアー」』と書かれていた。

デビルといえば、今、もつとも旬なアイドルグループだ。ファンクラブに入っている、ライブチケットは四年待ちになるほど手に入りにくいと友人に聞いたことがある。そんな貴重なものを寄越され、白雪は戸惑った。

「でもおじいちゃん。こんなにすごいチケット、私じゃなくて静香とか真琴に」

白雪は従妹たちの名前を出したが、祖父は小さく首を振る。

「あいにく、二人とも都合がつかなくてなあ」

悪戯っ子のような微笑みに何か嫌な予感を覚え、チケットを見直す。その日付は、今日を示していた。確かに今日言つて今日行ける人にしかチケットは渡せない。顔を上げて再度祖父を見ると、

彼はうんうんと頷いている。

「白雪、この後なんの予定もないんだろ？」

——その格好じゃ。

微笑む祖父の心の声が、続いて聞こえたような気がした。

(やられた……!!)

いつもの格好で出かけてきたことを心の底から悔いた。明らかにこの後、何も予定がないことを示す姿だった。まさか、自分の服装が原因で断れないなんて。

「楽しんでおいで」

有無を言わさぬ祖父の笑顔に、白雪は返そうと思っていたチケットをぎゅっと握り締めた。

チケットがよれた理由を思い出した白雪は、ため息をこぼした。

正直に言えば、アイドルなんて興味はない。そんな自分よりも、このチケットが欲しくてたまらない人が来てくれたほうが、彼ら^{デビル}だってうれしいだろう。

「はあ」

ライブよりも、恋愛映画の試写会のほうがよっぽどいい。こんなことなら、途中まで観^みていたドラマを全部観終えてから祖父のところに行けばよかった。

その後悔していた白雪の目に、一組のカップルが映る。

仲睦まじく指を絡めるように手をつなぎ、笑みを交わす姿はとても幸せそうだった。

「……いいなあ」

ふと漏らした本音には、「女の子扱いされたい」という願望が混ざっていた。

学校生活では、劇でもダンスでも男性役を務めることが多く、女性扱いされたことはほとんどない。祖父の開くパーティーでも、従妹たちのエスコート役を担^{まか}うのはいつも白雪だった。

「帰っちゃおうかな」

家でドラマの続きを観たいという気持ちが勝^{まさ}り、顔を上げたその時だった。

「ふぎゃっ」

目の前で星がはじけた。

傾く視界の端に、ぶつかってきた男性がキャップの下であつと口を開けているのが見える。だが次の瞬間、すぐに手首を掴まれて引き寄せられた。

「っあー、危なかったあ……!!」

ぎゅゅと抱きしめてくる男性の腕の中で、白雪の心臓がどつどつと、と大きく脈打つ。すぐに男性は、驚きのあまり声の出せない白雪を離し、「ごめん！」と言った。

「大丈夫？　ていうか、俺、ちょっと今急いでて、その、ほんつとごめん！」

謝る男性の声に重なるように、「どこ行っただー?」「そっちにいないー?」などと複数の女性の声が聞こえてくる。なんだかわからないが、追われて困っているようだ。

そう思った瞬間、白雪はそのまま立ち去ろうとする男の手首を掴んで駆け出していた。

「いっち」

「え!？」

「いいから!」

この周辺は詳しく知らなかったが、彼を捜す人たちに見つかる前にその場を離れた。一旦姿を隠すことができれば時間が稼げる。

そう思って駆け出した方がいいが、辺りを見渡しても、いい隠れ場所が見つからない。ドームの周りは人で溢れている。その中に紛れてしまえば見つかりにくいだろうと考え、女性グループの中を突っ切るうとした瞬間。

「そっちだめ、こっち」

掴んでいた手を掴み返されて、進行方向とは逆の進路を取らされた。

そうして走ることも数十秒。

「……とりあえず、ここで様子見……かな」

建物の間に隠れてしゃがみこみ、彼は言った。——その腕に、白雪を抱きしめて。

「なんか、巻き込んでやってごめんね」

白雪を見下ろすこげ茶色の瞳が、申し訳なさそうに言う。男性に抱きしめられたことなどない白雪は、自然と頬に熱がこもってくるのを感じた。

「い、え……。あの、むしろ私がよけいなことをして……」

「そんなことないよ。俺も君にぶつかっちゃったし。って、そうだ、怪我しなかった?」

腕の中から白雪を解放した男性が、心配そうな表情で顔を覗き込んでくる。その真剣な様子に、

白雪は口元に笑みを浮かべた。

「大丈夫です」

「よかったあ……。かわいい女の子に怪我をさせたととなると、申し訳ないからね。何もなくて本当にはよかった」

そんなこと、いまだかつて誰にも言われたことがない。初めて女性扱いされて目を瞞る白雪の頬を、彼はさりげない手つきで撫でる。びくりと肩を揺らす白雪に、キャップの男性が微笑んだ。

「そんなにかわいい反応されると、困っちゃうな」

甘く微笑む彼に、心臓がどくと反応した。ときめきで動けない。

そんな白雪をよそに、さっと物陰から辺りを見渡した男性が「そろそろ大丈夫かな」とつぶやく。その声で我に返り、白雪も同じように目線を外に向ける。するとそこには、誰かを探すようにまだ周囲を見渡している子が数人いた。

念には念を入れるべきだ。そう思った白雪は、視線を男性に戻す。

「あの」

「ん?」

「それ、脱いでください」

白雪はパーカーを脱ぎながら言う。

「は?」

驚く男性に、白雪は自分のパーカーを突き出し、代わりに彼のキャップを取り上げた。

「え、ちよっと」

声をあげた男性の、黒い髪の毛がふわりと舞う。白雪の周りに爽やかなコロンの香りが広がった。こげ茶色の瞳が驚きに揺れる。キャップをかぶっていたせいもあり、今まではつきり顔を見ていなかったのだが、白雪は彼がとても端整な顔立ちをしていることに気づく。

なんとというか、男性に使う言葉としては間違っているのかもしれないけれど、全体的な印象は「かわいらしい」。それなのに、きりつとした目元や、じっと見つめてくる意志の強そうな瞳は男性的で、「かつこいい」。つまり、「かわいい」と「かつこいい」が絶妙に調和した顔立ちだった。

見ていると、なんだか不思議な気分になる。今まで見てきた男性とは全然違う雰囲気圧倒されていた。

「君？」

じっと見つめる白雪に、彼は小首を傾げて不思議そうな顔をする。

「え、あ。すみません」

白雪は彼に見惚れていたことに気づき、急に恥ずかしくなった。いくら男性に慣れてないとはいえ、じっと見つめるなんて失礼だ。

「どこに誰がいるかわかりませんし、私が囧になります」

視線を逸らし、自分のキャスケットと彼の帽子を入れ替えてかぶり、平静を装う。再び顔を上げると、男性は驚きと戸惑いを露わにしていた。

「……どうしました？」

「いや、……言うことって、他にないのかなって」

呆然とつぶやく男にふむ、と一瞬考えてみるが、特に思いつかなかった。とはいえ、正直にそれを口にするわけにもいかないので、白雪は彼に対する素直な感想を口にした。

「かつこいいですね」

後輩や友人たちに対してなら、「かわいい」と言うところだが、今の相手は男性だ。「かわいい」

の代わりに別の誉め言葉を使う。

しかし、彼はなぜか目を瞬かせた。

「それだけ？」

その返答に、今度は白雪が驚きに目を瞬かせた。これ以上何を言えばいいのかわからず、眉間に皺を寄せて首を傾げる。彼は笑いながら、白雪のその皺をそっと指でほぐした。

「……なんででしょう？」

尋ねると、男性はこしこしと白雪の皺を人差し指で伸ばしつつも、何やら楽しそうな顔をしていた。

「なんでもない。変なことを訊いて悪かったね。それから、囧なんて物騒なことしなくても俺なら大丈夫だよ」

囧と言っても危ないことはしないし、女性の扱いに慣れているから大丈夫、と言い募ろうとする白雪の唇に、男性は指先を押し当ててにっこりと微笑んだ。

「女の子に危ないことはさせられないからね」

一瞬、息が詰まった。彼が自分を「女性」として扱ってくれている。そのことに、驚き以上に言葉にできない不思議な気持ち湧き上がる。言葉を失う白雪に、彼は差し出したパーカーをそっと押し返しながら彼が言う。

「名前、教えてくれないかな」

「え？」

「君のことを気に入ったんだ。これも何かの縁だし、よかつたら名前を聞かせて？」

悩んだのは一瞬、けれど決めたのも一瞬だった。

「——白雪です」

男性は一瞬驚いたように目を見開いたが、次の瞬間、ふっと表情を和らげる。三度そつと伸ばされた手が白雪の頬に優しく触れた。それから彼は甘やかに微笑んだ。

「ああ、……桜の名前だ」

どくん。心臓が高鳴り、その場から動けなくなる。

こんなことってあるのか。自分の名前を聞いただけで、それが桜の名前だなんてわかった人はいない。大抵は童話の『白雪姫』を思い浮かべるというのに、彼は一瞬で白雪の名前の由来を言い当ててしまった。

「俺、桜に縁があるみたい」

今までに感じたことのない心臓の高鳴り。男性はまだ動けない白雪に顔を近づけて、彼女のかぶっているキャップのツバを掴み、ぐっと引き下げてその視界を遮った。

「またね」

すれ違いざまにかけられた男性の声が耳に残り、やがてその気配が消えた。慌ててキャップのツバを上げ、振り返ってみたが——そこに彼の姿はない。まるで泡沫のように白雪の前から消えてしまった。

「……なんだったんだろう」

狐につままれたような気分で首をひねる。確かなものは、彼のかぶっていたキャップだけだった。

「あ、そうだ、ライブ」

立ち上がって建物の間から出たところで、ふいに今日の目的を思い出す。取り出したスマートフォン時計は、開場三十分前を告げていた。早く座席番号を確認して、どのゲートから入れればいいのか調べなければ。そう思っただけで取れたチケットを取り出したが、先ほど出会った男性のことが頭から離れない。ここにいるファンには申し訳ないが、デビルどころじゃなかった。

それでもチケットを確認し、自分が入る予定のゲート前までやってきたのだが、やはり気が乗らない。

「うん」

決めた。

白雪は、『チケットを譲ってください』と書かれた紙を必死に掲げる女子高生に近づいた。

「これ、どうぞ」

「……え？」

差し出されたチケットを前に呆ける女子高生につこり微笑むと、白雪は彼女の手にそのチケットを握らせる。

「え、……え!?」

彼女は驚きと喜びを露わにしてチケットと白雪を交互に見ていたが、やがてその顔は花が咲くように綻んでいった。

「もらいものでよかったです、なんだけど」

「か、構いません！ あの、チケット代……!」

「いいの、いいの。もらいものだから」

何度も「本当にいいんですか?」と訊いてくる彼女にくくりと頷くと、白雪は何度も頭を下げる少女に手を振って背中を向けた。脱いだパーカーを着て、オレンジ色に染まる空を見上げながら、祖父に感想を訊かれたらどう答えようか、と考えて、すぐにやめた。

今の白雪の関心は、——このキャップをかぶった男性にのみ向いていた。



「ただいまー」

「はい、おかえりなさい」

うつすらと月が輝く中、歩いて自宅に帰り着くと、フリルのエプロンをつけた母が玄関でにこやかに出迎えてくれた。年齢を重ねてもなお少女のようなかわいらしさを失わないその姿を見て、本当にこの人の血が自分に流れているのかと複雑な気持ちにさえなる。祖父も祖父で、還暦を過ぎてあの元氣だ。上条家の人間は、みんなこうなのだろうか。

そんなことを考えながら靴を脱いで家にあがる。母に続いてリビングに入り、テレビ画面に目を向けた。

「あ、まだやってる!」

白雪が夢中になっているドラマがちょうど流れていた。

急いでソファに座り、テレビに釘付けになる。そんな白雪をよそに、母はキッチンへ向かう。

画面には、土砂降りの雨の中、ヒロインにそつと傘を差し出す男子高校生が映っていた。

この作品は十年ほど前に映画化され、続いてテレビドラマ化、そして最近になって別キャストでリメイクされたばかりだった。今流れているのは、最初のテレビドラマの再放送だ。

内容は、ある理由から失声症になったヒロイン、美空と、その人気ゆえに孤高の存在となった若き作曲家のヒーロー、サクヤが紡ぐ恋愛ドラマ。プライドの高いサクヤが、美空との出会いをきっかけに徐々に人の温かさや優しさ、そして愛を知っていく。その様子が観る者の心に訴えるドラマだった。

美空には弟のような年下の幼なじみがいて、その彼がヒロインを陰から支える役目を担っている。

た。——それが、今テレビに映っている男子高校生、一晴だ。

前回は、美空とサクヤのキスシーンを見てしまったがために、一晴が美空を、姉でも幼なじみとしてでもなく、一人の女性として好きだと気づいたところで終わっていた。

そんな彼が、どうして雨の中、美空と一緒にいるのか。それを白雪が今のシーンから読み取るようになった時、一晴が動いた。

『っ!?』

驚愕して目を睜る美空。一晴が自分の腕の中へ引き入れるようにして美空を抱きしめたのだ。その拍子に、美空の持っていた傘がアスファルトに落ちる。しばらく雨の音だけになり、その間彼は美空への想いの分だけ、抱きしめる腕に力をこめた。その抱擁に、美空への愛しさが垣間見える。

自分が抱きしめられているわけではないのに彼のぬくもりが伝わってくるようで、胸がきゅうつと締め付けられた。

『俺に、……しなよ』

一晴の腕の中で、困惑した表情をする美空。

『本当はそう言いたいのをずっと我慢してた。だけど、……俺、こうしてみてもわかったんだ』

『……』

『美空は俺にはやっぱりお姉ちゃんみたいな存在で、アイツのそばでしか女になれないんだって』
そう言って美空を離れた一晴は、まっすぐに彼女を見た。その瞳は決意のようなものを宿している。

『だから、美空がめいっばいアイツを追いかけられるように、俺は全力で美空を守る』

笑顔を見せた彼は、美空の身体を反転させて後ろを向かせる。美空の視線の先に現れたのは、彼女を追いかけてきたのか、肩で息をするはず濡れのサクヤだ。美空の顔に、花が開くように笑みが広がっていく。そんな美空の後ろでは、一晴がじっと下を向いている。

『守るから』

心を締め付けるような切ない声から、彼の美空への気持ちが終わってないことを知る。笑顔で彼女を送り出そうとする一晴の健気な姿に、白雪の心は切なさでいっぱいになる。

こんなふうには、いつでも、何があっても美空を助けに来てくれる、そんな男性に愛されたらどれだけ幸せだろうか、と考える。だから白雪は、サクヤよりも一晴に愛されたいと思った。

『ほら、アイツのところに行つてこいよ』

最後にぐっと美空の肩を掴んだ彼は、顔を上げてその背中を押した。

そこから先は、雨の中、サクヤのもとへ駆けていく美空の背中しか映らない。彼は、一晴は今、どんな顔で、どうしているのか。白雪は彼のことが気になって仕方なかったが、ドラマはいつの間にかエンディングを迎え、画面には出演者のクレジットが流れていた。

その中で、一晴を演じていた俳優の名前に目を留める。

「……さくらい、たか、すみ」

桜井鷹澄。

自然とその名前をつぶやいていた。

一晴のことは今まであまり印象に残っていないなかったが、今回の放送でずいぶん存在感が増した気がする。すると、演じた俳優のことも気になり出すから不思議だ。

ふと、子供っぽさがまだ残る一晴の顔を思い出して、どこかで見たような錯覚に陥る。俳優なんだから、他のドラマで見かけていてもおかしくない。でも、そんな感じとも違う気がして、よけいに彼が気になった。

考えれば考えるほど深みにはまっていく。最近見た俳優の顔を思い浮かべてはあれも違う、これも違う、と脳内でバツ印をつけていくたびに、もやもやとした気持ちが増していく。考えるのをやめるタイミングも見つからず、むしゃくしゃし始めてきた。

——その時。

リビングの電話がけたたましく鳴り響いた。

「はい、中条です」

キッチンの子機で電話に出たのは母だった。

「あら、あなた。え？ え、ええ、いるけど……、白雪？」

カウンターキッチンから白雪の姿を確認した母が、火を止めてリビングまでやってくる。

「お父さんから。なんだか急いでいるようだから、早く出てあげて」

白雪に子機を手渡した母は、すぐにキッチンへ戻っていく。

「もしもし」

つけっぱなしのテレビの前で、受話器に耳をあて返事をした瞬間、小声ながらも切羽詰まったよ

うな父の声が聞こえた。

『おまえは、一体、何をしたんだ……!!』

事の重大さを理解しろ、と言わんばかりに言葉を区切る父の声に、白雪は首を傾げる。とりあえず、話を聞くためテレビの音を消した。

「何って、何かあったの？」

『今、御大おんたいに会ってきた』

御大というのは、祖父の別称だ。嫌な予感が出て、冷たい汗が背中を流れる。

『見合いをするっていうのは、本当か』

「……………は？」

思わず訊き返すと、父は声を大にして電話口で叫んだ。

『御大から、白雪にとって大量の見合い写真を渡された!』

その言葉に、白雪の時間が止まる。

——どうして、そうなるの？

『今日は御大に挨拶に行っただけじゃなかったのか？ 一体、御大に何をしたんだ……』

どうしたらいいのかわからない、といった様子で父は電話口でため息をつく。そんなことを言われても、白雪だって何が起きたのかまったくわからない。

『とにかく、渡されたものはしょうがない。これから見合い写真を持って帰る。母さんにもそう伝えておいてくれ』

唾然としたままの白雪の耳に、電話の切れる音が届く。身体から力が抜けて、力をなくした手が持っていた子機と共にソファの上に下るされた。

「見合いって……何？」

どう考えても理解できない。

白雪は祖父に電話をかけることにした。こうなったら直に訊くしかない。数回のコール音の間に、冷静になってきた頭で臨戦態勢を整える。

『おー、白雪。どうだ、ライブは楽しかったか？』

チケットを人にかけてしまった手前、罪悪感を覚えたが、今はそれどころではない。

「ちょっとおじいちゃん、見合いって何？ どういうことか説明してもらえない？」

『……なんだ、もう話が行ってしまったか……。つまらんなあ』

「つまるとかつまらないとか、そういう問題じゃないの！ わかる!? 私、まだお見合いなんて考えてないし、どうしてそうなったのか、全然わからないだけ!?」

『だって、見合いなら「非日常」だろう？』

「……………はい？」

『白雪が言ったんじゃないか、「非日常」が欲しいって』

「お見合いは、『非日常』なんかじゃありません!!」

『そうかー？ なかなかできないと思うんだがの』

「確かに、御曹司おんぞうしとのお見合いはツテがない限りなかなかできないと思うよ。でも、私はそういうの望んでない!! わかる!？」

白雪の従妹である静香は本家の娘なので十代のころから見合いをさせられているが、その相手は皆、御曹司と呼ばれる資産家の息子たちらしい。それが、本家のしきたりだと言っていた静香の話の思い出。だから今回の見合い候補がそういった御曹司の類だということは、容易に察せられた。『おお、よく御曹司だとわかったな。今回は、政界プリンスも追加しておいたから、よりどりみどりだぞ。好きなだけ悩むといい』

満足気な祖父の声に頭が痛くなってくる。白雪は大きく深呼吸をして自分を落ち着かせると、これ以上祖父のペースに巻き込まれないよう、「あのね、おじいちゃん」と話を切り出す。

しかし祖父は、白雪の言葉を遮さへぎって続けた。

『まあしかし、白雪が御曹司や政界プリンスが嫌だというのなら、これはわしの配慮が足りなかったな。……そうだ。もし、誰か気になる人がいるなら教えてごらん。その人と見合いができるようにセッティングしよう!』

本人は善意のつもりなのだろうが、白雪には頭の痛い提案だ。ため息をついて、「気になる人なんていない」と口にしようとした瞬間。

頭の中に、彼の顔が浮かんだ。今日会った、名も知らぬキャップの男性。

——とはいえ、現実ドラマのように都合よくいかない。再会が叶うなら、それこそ運命と言っ

てもいいぐらい。

「はあ、と大きいため息をついて首を横に振る。すると、視界にテレビの画面が入り込んだ。……え？」

そこにはなんの因果か、白雪がすっぽかした、というかチケットを手放してしまった、今日のライブの主役、デビルの五人が並んでいる。

その中の一人を見た瞬間、白雪の時間が再び止まった。五人のうち、一番右端に映っている男性の前には、

桜井鷹澄

と、名前が表示されていた。

それは、先ほどまで観ていたドラマに出演していた俳優の名前。

そして驚いたことに、彼は昼間、白雪のことを初めて女性扱いしてくれた男性だった。

その瞬間、すべてが一本に繋がる。一疇を演じていた時よりもずっと男性らしくなっていたせい、それが「彼」だということに結びつかなかったのだ。

白雪はあまりの偶然に思わず息を呑んだ。

『そうか、サクライタカスミだな！』

呆然とする白雪の耳に、祖父の意気揚々とした声が飛びこんでくる。受話器を持ったまま知らず

知らずのうちに、彼の名前をつぶやいてしまったのだろう。間の悪いことに、それを祖父の耳が拾ってしまった。

『今、なんとか先生とやりに訊いてみるからな』

某大手検索サイトの愛称を挙げて、祖父がばちとキーボードを叩く音が聞こえてくる。

「ちよつ、ちよつと待っておいちゃん！」

『おお、あったあった。なんと、今日渡したライブチケットのアイドルじゃないか！ さすが白雪、普通の男では物足りないというわけだな！』

「違うから！ そんなことないから！」

『まあ、見合いができるかどうかは調べてみないことにはわからないが、楽しみに待ってるんだぞ。また追って連絡する。それじゃあ』

「やだ、おじいちゃん切らないで！ おじいちゃん！ おじいちゃん!？」

何度も受話器に向かって呼びかけるが、無情にも返答はなかった。

「……切ら、……れた……」

耳に残る祖父の高笑いからは、嫌な予感しかしない。やる気だ。やる気である。祖父を相手にした疲労感で、急激に重くなる身体をソファに預け、白雪は天を仰ぐ。

どうしよう。

そう考え始めた瞬間、一縷の希望が頭に浮かんだ。

「そうだよ。いくらおじいちゃんがああ言っても、向こうが断つてくれるかもしれないじゃない。

そんなに心配しなくても大丈夫！」

——だって、相手はアイドルなのだから。

そんな「もしかして」に、小さな希望を託した白雪は、リモコンを手にしてテレビの消音を解除して、再び画面に目を向ける。

そんな白雪の頭からは、これから両手いっぱいの見合い写真を持ち帰る父に、必要がなくなったと言わなければいけないことなど、すっかり抜け落ちていた。

第二話

「もしかして」なんてなかった。

『見合いをセッティングした。着ていく服はすべて用意したから安心しなさい』

あの電話から数日後、唐突に、端的に、それだけを告げて祖父は電話を切った。白雪は電話の無機質な機械音を耳にしながら、これは祖父の狂言に違いない、と思いこもうとした。が、どうやらそうではなかったらしい。

——後日、祖父の言ったとおり、高価な着物一式が中条家に届けられた。

荷物を受け取った白雪は、頭痛を覚えた。確かに『非日常』が欲しいとは言ったが、こういうことじゃない。断じて、違う。しかし、白雪の気持ちは、結局最後まで祖父には伝わらなかった。

そして迎えたお見合い当日、三月二十七日。それは白雪が、就職を機に一人暮らしを始めるために引っ越しをする前日のことだった。

白雪は着慣れない着物に身を包み、都内にある某ホテル内の高級料亭の一室にいた。それも、たった一人で。美しい日本庭園や、涼やかな鹿おどしの音など、もはやどうでもいい。

これから会うのが、アイドルだと思おうと緊張で胃が痛む。

「……帰りたい」

い草の香りが立ち込める室内に、思わず漏らした本音が響く。だがそんな態度でいては相手に失礼だと気持ち切り替え、白雪は顔を上げた。

緊張をほぐすために背後の日本庭園を振り返ると、ちらちらと白い花びらのような雪が舞っていた。さつきまで降っていた雨が、いつの間にか雪に変わっている。季節はずれの雪が緑を淡く白で染め、幻想的な世界を作り出す。そんな様子に白雪は落ち着きを取り戻していった。

「白雪、遅くなつてすまなかつたな」

ふすまが開く音に祖父の声が重なる。白雪は即座に正面に向き直り、厚手の座布団の上で居住まいを正した。祖父に続いて、スーツを着た見合い相手も中に入ってくる。

——本当に、本物だ。

プライベートのせいとか、さすがにテレビとは少し雰囲気が違う。アイドルである桜井鷹澄を目の前にして白雪が言葉を失っていると、ふいに彼と目が合った。

「こんにちは」

黒い髪が揺れ、こげ茶色の瞳が優しく細められる。『かわいらしさ』と時折見せるきりつとした目元の『かつこよさ』。——やはり、彼だ。

やだ、本当にドラマみたいなのが起きるなんて。心臓がきゅうつと締め付けられる。

「やっぱり、また会えたね」

「……え？」

「言ったでしょ、桜には縁があるって」

鷹澄はご機嫌な様子で腰を下ろした。その言葉から、初めて会った時のことを言われているのだと気づき、白雪は驚きのあまり目を見開く。まさか、彼があの日のことを覚えているとは思わなかった。

「ほお」

上座に座った祖父が、口元を綻ほころばせる。祖父は座椅子の背もたれに身体を預けながら、満足そうに白雪と鷹澄を交互に見た。

「知り合いだつたのかな？」

何かを探るようなその声音に、白雪は注意深く言葉を紡いだ。

「顔見知り程度です。親しいわけではありません」

「そうなのかな、鷹澄くん」

「はい。白雪さんのおっしゃるとおりです。この間、たまたまファンに追いかけられた時、彼女が機転を利かせて助けてくれたんです」

「……ほう、白雪が？ これはまた、縁を感じるのう。ということは、それが理由でこの見合いの話を受けてくださったのかな？」

「あ、いえ。ここで白雪さんと再会したのはまったくの偶然です。このお話を受けたのは、兄が見合いで結婚相手を決めたため、その流れで俺もお見合いをするよう言われまして……」

「なるほど。運命を感じますな」

和やかな空気が流れている。どうやら祖父は鷹澄のことが気に入ったようだ。まずい。とても、

まずい流れになつてきている。このままだと祖父がまた無茶なことを思いつくかもしれない。

「運命ついでに、このまま一緒に住んでしまうのもいいかもしれないなあ」

案の定、祖父がそんなことを言い出した。慌てて祖父を見ると、とても楽しそうな笑みを浮かべている。嫌な予感的中したことに白雪は頭を抱えなくなった。

「白雪が鷹澄さんのマネージャーにでもなれば、四六時中一緒にいられる。その中で愛が芽生えるというのも、ドラマチックでいいじゃないか」

祖父の頭の中で勝手に自分の人生が展開されていく様子に、白雪は、自分だけでなく鷹澄の被る迷惑も考えてほしいと本気で思っていた。

祖父の悪い癖は、当人たちの気持ちを無視して話を進めるところだ。現に今、鷹澄だつて苦笑を浮かべている。そもそもアイドルは恋愛がご法度ではないだろうか。現に発覚するたびにワイドショーなどで大きく取り上げられている。恋愛だけであんなふうには芸能記者に追い掛け回されるのなら、今回のお見合いだつて面倒なことに繋がるかもしれない。先日ちらりと見たスキャンダル映像が思い浮かび、白雪は身震いする。改めて彼にそんな迷惑はかけられないと思つた。

「さて、そろそろ始めようかの」

祖父の満足気な表情にさらに不安を感じる。——そして、同時に疑問も思い浮かんだ。

今まで冷静に考えていなかったのだが、どうして祖父は鷹澄を見合い相手として連れてきたのだろうか。

父が持ち帰つた見合い写真と釣書を一応見てみたが、どれも素晴らしいバックボーンを持つ者ばかりだつた。資産家の息子、政治家の息子、はたまた警察官僚の息子までいる。そんな男性たちと比べ、アイドルである鷹澄はあまりにも異質だ。白雪が名前を口にしたからといって、この祖父がそれだけで鷹澄を見合い相手として連れてくるとは考えにくい。もしかしたら何か他に考えでもあ

るのだろうか？

何しろ、鷹澄はこんな自分を初めて女性扱いしてくれた男性だ。きつと優しい人なのだろう。そう考えると彼は、単に断りきれなかっただけという可能性が高い。ここは丁重に自分から断りを入れよう。それが、穏便にこの場をやり過ごし、なおかつ鷹澄に迷惑をかけないための最善策だ。

「白雪」

祖父から声をかけられて、我に返つた。白雪は思考を一度閉じて、座布団から身体を後退させ、深々と頭を下げた。

「中条白雪と申します。歳は二十二。大学を卒業して来月から都内の出版社に勤めることになっております。ご多忙の中、この度のお話をお受けくださいますと、誠にありがとうございます」

ここまでは、テンプレートともいえる挨拶。これぐらいの挨拶なら、親戚付き合いでいつもやってきたから慣れている。——が、ここからが本番だ。

顔を上げて、しっかりと鷹澄の顔を見つめる。

「しかしながら、私は結婚をする気はありません」

「白雪！」

そう宣言した白雪に、祖父の窘めるような声が飛ぶ。

「桜井さまには大変申し訳ございませんが、まだ人としても未熟な私に、伴侶を持ち、その方を支えるという務めは荷が重いと考えております。こちらからお断りしたことはございますが、謹んでお断り——」

「待ってください」

再度、深く頭を下げようとした白雪の言葉を、鷹澄のやわらかな声が遮る。白雪は中途半端に頭を下げた状態で動きを止めた。

「そこから先は、まだ言わないでいただけますか？」

「……………え？」

白雪が顔を上げると、鷹澄の顔が何か楽しいものでも見つけたように綻んだ。

「白雪さんは一方的にそうおっしゃいますが、できれば俺を知ってから答えを出していただきたい」

白雪は言葉を失った。てっきり彼は断ることを前提にこの場にいとばかり思っていたからだ。

それなのに、なぜか彼は見合いを続けようとしている。白雪が動揺を隠して鷹澄の表情を窺うと、彼は挑戦するかのように見返してきた。まるで白雪の考えていることはわかっている、とばかりに。

「だって、おもしろいじゃないですか」

彼の唇の端が上がる。そんな鷹澄の背後に、大きく揺れる悪魔のしっぽが見えたような気がした。

「白雪さんは俺がアイドルだと知って見合い相手に指名してきたにもかかわらず、俺に興味のひとつも示さない。そして挙句の果てに何も話さないうちに断りを入れようとしている。……失礼にも

程があると思いませんか？」

親しみを感じさせるこげ茶色の瞳が鋭く細められる。その視線に射抜かれ、白雪の背中に冷たいものが流れた。

確かに鷹澄の言うとおりで。どんな形であれ、白雪が鷹澄を指名したのは間違いない。それなのに白雪から断りを入れようとしているのだから、普通に考えれば相手がアイドルであろうとなかろうと、失礼な行為だ。

「ち、ちが」

弁解しようとしても言葉が続かない。とはいえ、今さら白雪が何を言ったところで彼の気持ち収まるわけでもない。もつとちゃんと彼の立場になって考えればよかった。

何を言っても言い訳がましく聞こえてしまうことに気づき、白雪はその場で固まる。そんな白雪を見て鷹澄の表情が和らぐ。

「でも、俺を知ってから断るのであれば、しょうがないですよ。それなら見合いも成立することになります」

「……それは、どういうことかね」

祖父が白雪に代わって訳ねる。鷹澄はまるで楽しんでるかのようになり、ある提案を口にした。

「白雪さんに、俺の専属マネージャーになってもらいたいです。そうしたら、てっとり早く俺のことを知ってもらえるでしょう？」

彼の背後にある悪魔のしつぽが、ゆらゆらと揺れる。そんな幻覚に頭が痛くなる。確実に自分に対する——嫌がらせだ。先ほど就職が決まっていることはちゃんと伝えてある。それなのにあえてこんなことを言ってくるのだから、嫌がらせとしか思えない。

手が氷のように冷たくなっていく。しかし、今は固まっている場合ではない。早く何か言わなければ、先ほど祖父が楽しそうに語っていた妄想が現実になってしまう。それだけは阻止しなければ。その気持ちだけで口を開いた。

「ちよつと待ってください……!」

楽しそうに小首を傾げる鷹澄を見ながら、白雪はまず呼吸を整えた。

「……あのですね、私は来月から会社員になります」

「さつき聞いたよ」

「社の方針で、ダブルワークは禁止されています」

「まあ、だいたい企業がそうだろうね」

「で、ですから、専属マネージャー以外のことで、責任を取らせてください!」

「口元に微笑みを浮かべたままの鷹澄の視線が怖い。」

「責任の取り方もわからないのに、無責任に『責任』なんて言葉、口にしないでくれる?」

冷やかな言葉に泣きそうになる。

頭の中であーでもない、こーでもないと考えてみるが、反論は思い浮かばなかった。かといって、内定を入社直前に蹴るというのはさすがに憚られる。もしダブルワークの事実を隠して入社したと

しても、仕事の片手間にアイドルのマネージャー業務なんてできるのだろうか。

どの選択肢にも不安しか浮かばず、白雪の頭の中は八方塞がりになった。

明らかなのは、会社は辞めたくないが、鷹澄に対しての責任はとらなければいけない、ということだけ。

口を開いては閉じるを繰り返す白雪と、微笑みだけは崩さない鷹澄。その時。

「ちよつといいかの」

二人の様子を上座^{かみざ}で見ていた祖父が間に入った。

「確かに、鷹澄くんの気持ちになれば今の白雪の申し出は失礼極まりない。それに関しては、私も責任がある。不愉快な思いをさせてしまい、本当に申し訳ない」

深く頭を下げる祖父の姿に、白雪は後先考えず行動してしまったことを悔いる。自分のせいで身内に頭を下げさせるということが、どれほど恥ずかしいものか初めて知った。

申し訳なくて、情けなくて視界が涙でじんわり滲んでくる。

「かといって、私が頭を下げるだけでは気が収まらないだろう。そこで、提案がある」

「提案、ですか……?」

「ああ。——この白雪と勝負をしてみないか?」

何を言い出すのか、と凝視する白雪に構わず、祖父は続けた。

「白雪が勝ったら、この見合いを白紙に戻させていたたく。またお詫びとして慰謝料をそちらにお支払いしよう。逆に鷹澄くんが勝った場合は、君の提案を受け入れる」

「と、いうことは？」

「白雪にはダブルワークを覚悟で、鷹澄くんの専属マネージャーになってもらう。どうだろうか、鷹澄くん」

まさかの展開に言葉を失う白雪をよそに、鷹澄は、「おもしろいですね。構いません」

と乗り気だ。

「ありがとう。では、白雪もそういうことでいいな」

念を押されて、白雪も仕方なくうなずいて見せる。

「勝負の内容は、男と女の力の差もありますから、白雪さんが決めてくださって結構です」

「……いいんですか？」

「ええ。勝負はフェアにやるほうが楽しいからね」

自分がこの窮地から抜け出すためには、鷹澄に勝つしかない。祖父が頭を下げてまでこの状況を作ってくれたことに感謝し、白雪は深く息を吸ってから言い放った。

「それでは、剣道で私と勝負してください」

これなら、なんとかなるだろう。

しっかりと相手を見て申し出た白雪に、鷹澄は微笑んだ。

「わかりました。僕も剣道は多少嗜んでいましたので」

この流れを受けて、すぐに動いたのは祖父だった。

「では、今からすぐに準備をしよう。それまで、二人ともここで待っていてくれるかの」

立ち上がりざま、スマートフォンを取り出した祖父は、秘書に電話をかけ、そのままいそいそと部屋から出て行く。すると部屋には白雪と鷹澄の二人きりになった。

いくら勝負をすと言っても、自分の無礼はちゃんと謝りたい。

白雪は一度立ち上がり、冷めきったお茶を飲む鷹澄の前に正座した。

「ん？ 何？」

先ほどとは打って変わってにこやかな笑みを浮かべる鷹澄に向かい、白雪は畳に手をつけて頭を下げる。

「今日は本当に申し訳ございませんでした！」

精一杯の思いで謝罪を口にした。社会人未経験者が軽々しく「責任をとる」なんて無責任なことを言い、結局祖父に尻拭いをさせてしまった。自分の失態の責任をとれていないのだから、まさに無責任だ。だから今、自分ができうることをしたかった。

「桜井さんの立場を踏みにじるような真似をして」

「佐倉」

鷹澄の声に言葉を遮られ、白雪は顔を上げた状態で停止する。

「桜井は母の旧姓、本名は佐倉鷹澄」

「……………は？」

何が言いたいのかわからず、白雪は気の抜けた返事しかできない。

「あ、でも、佐倉って苗字あんまり好きじゃないから、できれば鷹澄って呼んでもらえるかな」
「え？」

「俺も白雪って呼ぶし」

哑然とする白雪に、鷹澄が笑顔のまま続ける。

「それから、安心していいよ」

「あん、しん……？」

ついつと口の端を上げた鷹澄の端正な顔がゆっくりと近づいてくる。至近距離になった瞬間、キスを誘うように彼の唇が開かれた。

「——俺は、適当な気持ちでお見合いしただけで、この再会が運命だなんて感じてないから」

甘い表情のまま、冷たい言葉で突き放す。

「せいぜい、楽しんでくれよ」

まさに悪魔デビルのようだと思った。



その後、祖父の手配でホテルの近くにある剣道場を借りることができた。その責任者と祖父が顔なじみらしく「青慈くんの頼みとあらば！」と快諾してくれたそうだ。こういうところに祖父の顔の広さというか、人望の厚さを改めて感じる。

剣道着や防具一式も貸してもらい、着々と試合の準備が整えられた。白雪は道場特有の古い木の香りに懐かしさを感じながら、しっかりと防具を身に着ける。紺の道着を着た鷹澄も同じように準備をしていた。

「竹刀たけとうは、さぶはち？」

「いいえ。さんくで」

「男性の一般用の大きさだよ？」

「お気遣いはありがたいですが、このサイズが手になじみますので」

「さぶはち」「さんく」とは竹刀の長さのことだ。正確には、それぞれ三尺八寸さんじやくはつぷん、三尺九寸さんじやくきゆうぷんと表す。ただカタログなどには『38』や『39』と記載されるため、このように呼ばれているのだ。

竹刀を手にした白雪に、鷹澄が勝負内容を告げる。

「時間無制限の一本勝負。問題は？」

「ありません」

「じゃ、やろうか」

気合が声に出ている白雪に対し、鷹澄の声は軽い。まるで相手にされていないようにも感じる。

白雪は正座をしながら、しっかりと手ぬぐいを頭に巻きつけ、最後に面をかぶり、後ろにある紐をぐっと引いて結び終える。それから精神統一のために、何度も深呼吸をした後、白い線で描かれた試合場の両端に立って鷹澄と向き合った。

「お互いに、礼！」

気合の入った号令を受けて礼をすると、道場内が緊張に包まれる。白雪は、このぴんと背筋の伸びるような、張り詰めた空気が好きだった。

審判を務めてくれるのは、剣道場の責任者兼師範代の男性一人。本来の試合形式では主審副審併せて三人必要なのだが、急に決まったことなので、そこまで用意ができなかった。

お互いに中央部分にある白線まで進み出て、竹刀を構え蹲踞の姿勢をとる。竹刀の先端を合わせつつ鷹澄を見るが、やはり緊張感のかけらも伝わってこない。しかし白雪は、試合場に足を踏み入れた時から、どこことなく彼の空気が変わったように感じていた。

(なんにせよ、心で負けるわけにはいかない)

勝負は竹刀を合わせる前から始まっている。

心技体。この言葉どおり、武道を嗜む上で最も大事とされるのは心だ。

静かに闘志を燃えたぎらせ、白雪は審判からの号令を待つ。

「はじめっ!!」

試合が始まった。

「はああああっ!!」

立ち上がって威嚇をするべく腹から声を出す。しかし、鷹澄はじつと立ったまま動かない。静かにこちらの隙を窺っているようだ。白雪もむやみやたらと動かず、まずは鷹澄の様子を見ることにした。

静かに呼吸を繰り返して立っているだけの彼の気配に、不思議と引きこまれる。

まるで桜のようだ。静かに佇んでいるだけなのに存在感があり、花を咲かせているかのように華やかだ。そんな鷹澄の立ち姿に、気づけば見惚れてすらいた。

しかし、今は見惚れている場合ではない。

向こうにその気がないのなら、こちらから行くまでだ。小さく息を吸って——足を踏み出した。

「はあっ!!」

浅めに踏み込んで小手を狙うが、あつさりと避けられる。真正面からぶつかっていったのだから、ここまでは想定内だ。白雪はすぐに体勢を立て直し、次の一撃に向かう。素早く踏み出して面を狙うと、今度は首を傾けることでうまくかわされてしまった。

が、狙いはそこじゃない。体当たりして鏢迫り合いに持っていき、離れ際を狙う。

(今だ……!)

後方に飛ぶように下がった瞬間、無防備な面を狙って竹刀を振り下ろす。——が、その引き面はすんでのところで相手の竹刀に払われた。得意技と自負していた引き面を簡単にいなされ、白雪は相手の腕が、剣道を「嗜む」以上のものであることを肌で感じた。明らかに有段者だ。

悔しさのあまり心に動揺が走るが、冷静さを欠いてはいけないうちに気持ちを切り替える。そうしなければ、相手に隙をつかれて一本とられてしまう。

間合いを取って静かに竹む鷹澄を見つめる。

深く息を吸い込んで、白雪は再び鷹澄の懐に飛び込んだ。

「はああああああっ」

だんっ。

力強く板張りの床を踏み込む。「面を狙って竹刀しなばを振りかざすが、それはフェイントだ。防御のために腕を浮かせた鷹澄の胴を狙う。持ち手を短くし、弧を描くように竹刀の先端を胴めがけて素早く振り下ろす。

(いける……!)

しかしその瞬間、鷹澄は軽やかに後方に飛び、白雪の渾身こんしんの一撃をいなした。白雪はやむなくそのまま鷹澄の脇を抜ける。

「甘い」

左後方から鷹澄の声が聞こえる。これが最後とばかりに深く踏み込んだため、一瞬反応が遅れた。まずい。頭の中に『敗北』という文字が浮かぶ。

「くうっ」

咄嗟とつさに振り返り、竹刀を頭上上げる。振り向きざまに面をとられることは防げたが、鷹澄から振り下ろされた一撃の重さに、支えきれなかった身体が後ろへと傾く。

「……………え？」

床板に背中から激突するのを覚悟したが、そんな白雪の腕をすんでのところでつかんで引き戻してくれたのは鷹澄だった。

「あ、ありがとうございます」

「これぐらいでほだされてたら、次の一撃で負けるよ」

体勢を整えて頭を下げる白雪に、鷹澄はすれ違いざまに忠告をしてきた。それから中央の位置につくとすぐに竹刀を構える。白雪も倣なまうように最初の位置について竹刀を構え、気合を入れ直す。

(次だ。次で決めよう)

深呼吸をして精神を統一させる。そこで審判から試合再開の声があがった。

「はっ」

さっきの失敗によるもやもやを吐き出し、挑むように鷹澄を見つめて、白雪は思わず息を呑んだ。——さつきと、全然違う。

やばい。気迫が違いすぎる。先ほどまで蝶のようにひらひらと攻撃をかわしていた鷹澄が、初めて攻めの姿勢を見せた。殺気と気合を鎧のように全身に纏まとっている。——それが、すべてを決めた。

一瞬——たった一瞬の心の隙をつき、彼は深く踏み込んで白雪の面に竹刀を振り下ろしたのだ。

「面あり、一本！ 勝負あり！」

防御する暇もなく、正確かつ重い一撃を頭に受けて、白雪は呆然とする。

——全然、動けなかった。

まるで、その場に足を縫い止められたようだった。

白雪は今までにないほどの徹底的な敗北を悟る。悔しさ以上に驚きのほうが強い。

けれど、すぐに足を踏み出し、中央にいる鷹澄と向き合う。竹刀を構えたまま蹲踞すんぎょの姿勢をとり、竹刀を脇に収めてから立ち上がる。そして後方に下がり、一礼。

(……終わった)

いろんな意味で。

白線で区切られた試合場から出て、防具を脱ぐために正座する。紐でしっかり固定していた面を外しながら、白雪は自分の未来を案じた。正社員で入社したからには、基本的にダブルワークは禁止だ。たとえそれを内緒にしたとしても、激務と予想されるマネージャー業とどうやって折り合いをつけていったらいいのか。

「……どうしよう」

思わず不安が口からこぼれ、脱いだ面の上に落ちた。

再度、大きなため息をついた白雪の前に、紺の道着が現れる。顔を上げた先には、たった今自分を打ち負かした鷹澄のかわいらしい笑顔があった。彼はしゃがんで、白雪と視線を合わせる。

「そんな顔しなくても大丈夫だよ？」

「……この状況で不安にならないほうが、おかしいです。ていうか、剣道有段者だなんて聞いてません！」

「言う必要ないでしょ。ハンデでも欲しかったなら別だけど」

「……ッ、ハンデなんていりません」

「そう言うと思ったから、黙ってたんだよ」

確かに試合前に彼が有段者だと聞かされたとしても、白雪は同じ返答をしていただろう。それを飄々とした笑顔で言い当てられ、白雪は唇を噛んだ。

「……もお、いったいあなた何者なんですか」

「ただのアイドルだよ」

その笑顔が、胡散臭いと思うのはどうしてだろう。

「まあとにかく、これで白雪は俺のモノってことでいいんだよな」

「……………え？」

「マネージャー業のこともそうだけど、せっかくだからそのまま婚約者ってことにしちゃってもいいと思うんだ。なんか白雪の会社のこととかいろいろ面倒くさそうだし。婚約者の家業の手伝いでことにすれば言い逃れできるでしょ？」

「こ、婚約者がいることは、面倒くさくないんですか!？」

「うん。ここからは俺の都合で申し訳ないんだけど、今俺、婚約者がいないと困るんだよ。そうじゃないと次から次へと話を持ってこられるし、アイドルなのに見合いですぐにフラれたっていうのもカッコ悪いでしょ？」

聞いている白雪自身も心が痛い。だが、せめて自分の本心を伝えようと口を開く。

「何が？」

「私は別に、さく……た、鷹澄、さんが嫌いで、とか、気に入らなくて断ろうとしたわけじゃないですから」

「……違うの？」

驚く鷹澄に向かって、白雪は言葉を続ける。言い訳をするつもりはないが、言えるのは今しかないと思っ

「違いますよ。……だって、鷹澄さんアイドルでしょう？ アイドルにとって恋愛がご法度はつとなのは、一般人の私だって知ってます。そんな人に婚約者がいるなんてわかったら、……やっぱり迷惑がかると思います。鷹澄さんに」

それなのにこの勝負に負けてしまった。そもその原因は、祖父の前で不用意に鷹澄の名を口にした自分にある。だからこそ、自分に腹が立った。彼はある意味、白雪と青慈に巻き込まれた被害者だ。そう思うと本当に心が痛む。

けれど、今の鷹澄はきよんとしていた。

「鷹澄……さん？」

「じゃあ、アイドル抜きにして白雪の今の気持ちを聞かせてくれないかな」

「……そんなこと言われても……」

「アイドルだって、一人の男だよ」

戸惑う白雪に、鷹澄は真剣に告げる。その気持ちに素直に向き合った白雪は、静かに口を開く。

「……興味がなかったら、鷹澄さんの名前なんて出しません。私も、……その、できることならもう一度会いたい、と思ってました……から」

最後のほうはもう恥ずかしくなって、声が尻すぼみになった。

「じゃあ婚約者でもいいってこと？」

「私は構いませんけど、……鷹澄さんは本当にご迷惑じゃないんですか？」

「……んー、まあ、俺は大丈夫」

そう言って笑う鷹澄が、やはり信じられない。何か白雪の知らない秘密がそこに隠されているようで気が気でない。

「じゃあ、そういうことでよろしくね、白雪」

嬉しそうにかわいい笑みを浮かべた鷹澄が、ぐっと近づく。避ける間もなく白雪の鼻の頭にやわらかな感触が押し当てられた。

「俺の、婚約者さん」

鼻の頭から唇を離れた鷹澄が、軽い身のこなしで立ち上がり、背中を向ける。その歩き方にも華があるように見えるのは、きつと気のせいだ。

「……しまった。婚約はともかく、ダブルワークの件、断るの忘れてた……」

鼻の頭に残った彼の微熱が白雪の頬を桜色に染めるまで、そう時間はかからなかった。



「どうも、ありがとうございました」

荷物を運び終えた引越業者を新居のドアの前で見送りながら、白雪は深々と頭を下げた。

怒涛どたごうのお見合いから一夜明けた、翌朝の引越当日。ダブルワークやお見合いの件などで正直不安が先にたつたが、白雪は気持ちを切り替えて、自分のやるべきことをやっていた。

白雪がこの春から暮らす新居は、少し広めの1DK。システムキッチン、玄関ダブルロック、ダ

インングにはTVモニターホンも完備。マンションのエントランスはオートロック式で、防犯カメラもついている、なかなかの物件だった。実はここは、孫の一人暮らしと聞いて祖父が提供してくれたマンションだ。家賃も白雪にも支払い可能な額で、両親が一人娘である白雪を心配してセキユリティの高い物件を望んでいたこともあって、ここに即決したのだ。当然、家賃なんていらぬという祖父の言葉は無視された。

新しく買った家具などはあらかじめ新居に運び入れ、今、実家からの荷物の最後のひとつを受け取った。

「よし、あとは荷解きだけ！」

お辞儀していた頭を勢いよく上げた白雪の目が、その瞬間、すぐそこで開いたエレベーターに釘付けになる。

「……………うそでしょ……………?」

呆然とつぶやいた白雪の視線の先には、見慣れたキャスケットをかぶった男性がいた。それは、白雪が初めて彼と出会った時にかぶせたもので――

「こんにちは。今日から隣に住むことになりました」

男性はそう言ってキャスケットを押し上げ、にっこり微笑んだ。

――ここで名前は言えないから、これで察して。

彼――佐倉鷹澄の笑顔が、そう告げていた。

「それじゃ、あとはよろしくお願いします」

あまりのことに言葉もない白雪を横目に、鷹澄と一緒にエレベーターに乗っていた引越業者数人を引き連れて廊下を進む。そしてある部屋の前で鍵を取り出し、玄関ドアを開けた。確かにそこは、白雪の隣の部屋だった。

忙しなく彼の部屋に荷物を運び入れる引越業者を見て、白雪は我に返る。

「あのー！」

「ん?」

「ちよっと、いいですか」

白雪は鷹澄の手を掴んで自分の部屋のドアを開ける。

「え、白雪……………!?!」

玄関を上がり、突き当たりを曲がってダイニングキッチンへ。さらにそのダイニングキッチンを突っ切り、奥の部屋に向かった。そこにはベッドと、お気に入りの大きなビーズクッションしかない。他に座ってもらえるようなものがないため、そのベッドに鷹澄を座らせる。まさかフロリングに直に座らせるわけにもいかない。

「ど、どうということなんですか……………!?!」

戸惑いの声をあげる白雪の前に、鷹澄はキャスケットを取って微笑んだ。初めて会った日のように、黒い髪がふわりと舞う。そこから彼の香りがした。自然ときめく心臓の音は、この際聞かなかったことになっておく。

「どうということって……………、それは俺が訊きたいんだけど……………」